西新井遺跡第4地点

老人ホーム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2014.7

前 橋 市 教 育 委 員 会 有限会社毛野考古学研究所

例 言 · 凡 例

- 1. 本書は老人ホーム建設に伴う西新井遺跡第4地点の発掘調査報告書である。
- 2. 本遺跡は県遺跡台帳では上沖五反田遺跡となっているが、学史的には西新井遺跡で知られているので、ここでは西新井遺跡として報告する。前橋市の遺跡略称は25H56である。
- 3. 本遺跡は前橋市幸塚町75番地に所在する。
- 4. 発掘調査は事業者である高橋利明氏より委託を受け、(有)毛野考古学研究所が行った。
- 5. 調査組織は以下のとおりである。

【調査指導】

【発掘調査】

前橋市教育委員会文化財保護課

副参事兼埋蔵文化財係長 前原 豊

主任

福田貫之(試掘担当)

調查担当 長井正欣調 査員 浅間 陽

(有)毛野考古学研究所

同

阿久沢智和

同 大工原 豊

6. 発掘調査は、(有)毛野考古学研究所長井正欣が担当し、調査員として浅間 陽(毛野考古学研究所)、大工原 豊(國學院大學兼任講師)が従事した。また、調査には設楽博己(東京大学教授)、守屋 亮(東京大学大学院)、林 正之(同)が特別参加した。その他の調査参加者は以下のとおりである。

【発掘調査】石倉稔夫、井上ゆかり、岡村美弥子、川島隆好、竹生正明

【整理作業】林 正之、守屋 亮、山下優介、大出小夜子、梶井貴博、田崎慎太郎、原田功至(以上東京大学学生)、青柳美保、石倉稔夫、石山亜希子、大滝千晶、瀬尾則子、高橋真弓、竹生正明、成田恵美、橋元裕児、真下弘美、山下奈邦子、山本良太(順不同・敬称略)

- 7. 発掘調査は平成26年1月15日~1月23日、整理作業は平成26年2月10日~7月31日に行った。
- 8. 本書の編集は大工原が行い、浅間がこれを補佐した。本文は福田、長井、大工原、設楽が執筆し、文末に担当者名を表記した。
- 9. 調査にあたり、以下の方々の協力を得た。記して感謝の意を表したい。 上原 清、大坂 拓、小野久米夫、加部二生、川鍋正規、後藤佳一、佐々木由香、設楽光弘、 中島啓治、巾 隆之、平方 敦、森 将志、吉川裕司(敬称略)
- 10. 調査区平面図、土層断面図は1/80である。
- 11. 遺物実測図の縮尺は土器・土偶が1/3、A類石器2/3、石核A類・敲石1/2、B類石器1/4である。なお、石器の分類・形態については『縄文石器研究序論』(2008)に準拠した。
- 12. 写真図版の縮尺は土器・土偶の縮尺が任意、A類石器 1/1、石核 A類 2/3、その他 1/2 である。
- 13. 石器一覧表、図中の石器石材の略称は次のとおりである。 硬質頁岩: HSh、黒色頁岩: BSh、黒色安山岩: BAn、砂岩: Sa、黒曜石: Ob、チャート: Ch

目 次

1	調査に至る経緯・調査の経過1	5	縄文土器と土偶6
2	調査の方法1	6	縄文石器11
3	遺跡の地理的・歴史的環境2	7	成果と問題点14
4	土層堆積状態4		

1 調査に至る経緯・調査の経過

調査に至る経緯 事業者である高橋利明氏より試掘調査依頼書が提出され、平成25年12月20日に 試掘調査を実施した。その結果、縄文時代晩期の遺物包含層が確認された。

その後、現状保存について度重なる協議を行ったが、建物のエレベーターピットについては現 状保存が不可能であるため、発掘調査を実施することで合意を得た。

発掘調査は「群馬県内の記録保存を目的とする埋蔵文化財の発掘調査における民間調査組織導入事務取扱要綱」に則り、市教育委員会の作成する調査仕様書に基づく監理・指導の下、実施することになった。平成26年1月9日付けで事業者、民間調査組織((有)毛野考古学研究所)、市教育委員会との間で発掘調査実施に関する協定書が締結され、本調査の実施に至った。(福田)

調査の経過 本調査は遺物包含層まで掘削するエレベーターピット部分を対象として、平成26年 1月15日から1月23日までの間行った。天候に恵まれ、作業は順調に進行した。

最初にバックホーにより表土層(Ia 層)から浅間 B 軽石層直下の鉄分を含む黒褐色土層(V 層)まで層ごとにスライスするように掘削を行った。遺物を包含する黒褐色土層(VI 層~VI 層)については、人力により層位ごとにVI 層・VI 層の順に精査を行った。

そして、遺物の出土しなくなる礫層(畑)上面で掘り下げを止め、写真撮影と各種図面作成を 行い、調査は終了した。

また、精査と並行して遺物包含層の土壌を土嚢袋につめて一時保管し、電動フルイを用いた土 壌ふるい作業を行い、微細遺物の回収を行った。一部残った土壌は持ち帰り、遺物整理作業時に ふるい作業を行った。(長井・大工原)

2 調査の方法

調査区の設定 発掘調査区は 6×6 mの範囲であったため、グリッドは 1×1 mで設定した。グリッドの呼称は調査区北西隅を基点とし、そこから東方向へ $1.2.3 \cdots 6$ 区として、折り返して順次南へ下がっていき、南東隅が36区と呼称した(第3図右)。

遺物取り上げ方法 遺物はグリッド単位で層位ごとに取り上げた。なお、試掘トレンチが調査区 東側に重なるように南北に存在していたため、 $6\cdot 12\cdot 18\cdot 24\cdot 36$ 区は、 $VI\sim VIII$ 層の大部分がすでに掘削されていた。したがって、試掘調査で回収された遺物はほぼこの部分に相当するものである。

微細遺物については電動フルイ(1×1cmメッシュ)を用いてふるい作業を行い回収した。ちなみに、本遺跡から出土した石鏃はすべてふるい作業によるものである。

記録の方法 調査時の写真撮影はデジタルカメラにより行った。また、遺物分布図は作成せずグリッドで出土位置を記録した。なお、1・2区の一部の遺物については、部分的に遺物出土状態 微細図作成と写真撮影を行った。

平面図は平板測量により行った。また、調査区の土層断面図はポリフィルムを直接貼り付けて 1/1で作成し、遺物整理時に長焦点法で平行移動させて写真撮影を行い、縮小させて図化を行っ た。(大工原)

なお、調査期間中に(株)パレオ・ラボの佐々木由香氏・森将志氏に土壌中の花粉及びプラント オパールの分析を依頼した。分析費は、設楽の科研基盤A「植物・土器・人骨の分析を中心とし た日本列島農耕文化複合の形成に関する基礎的研究」から捻出した。西新井遺跡の**総**合報告の際 に掲載することにしたい。(設楽)

3 遺跡の地理的・歴史的環境

地理的環境 西新井遺跡は、前橋市幸塚町に所在し、赤城山の南南西に位置する。現在は遺跡の南西には桃の木川が北西から南東方向に流れ、その支流の竜の口川が遺跡の北東を同じ方向に平行して流れている。遺跡はこの二つの河川に挟まれた沖積低地に存在する。この沖積低地は古利根川の氾濫原であり、広瀬川低地面と呼ばれている。本遺跡が形成された縄文時代後・晩期においても、こうした河川氾濫原の地理的環境にあった。

遺跡周辺の微地形をみると、河川の流れる方向に沿うように、北西から南東方向へ緩やかに傾斜している。現地表面の標高は105.5m前後である。(大工原)

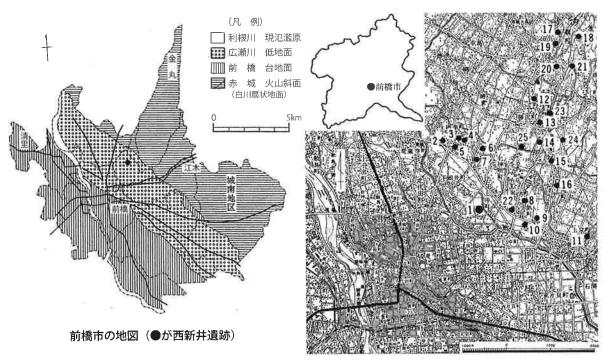
歴史的環境 第1図は、本遺跡の周辺に分布する縄文時代の遺跡である。そのほとんどすべてが 赤城山山麓の台地に立地するが、崖線上と藤沢川流域に集中して分布している。

これらのうち、端気遺跡群 I、小神明遺跡、芳賀北部団地遺跡、芳賀東部工業団地遺跡などが1980年代前半までに発掘調査されている。端気遺跡群 I では諸磯 c 式の住居跡が、小神明遺跡では後期初頭の敷石住居跡が調査されている。芳賀北部団地遺跡と芳賀東部工業団地遺跡は大規模な発掘調査が行われ、前者から27棟、後者から58棟の竪穴住居跡が検出された。詳細は不明だが、前期から後期にわたるらしい。

第1図の遺跡の大半が、縄文中期~後期初頭の遺跡であるが、嶺町大林下遺跡、入替戸十二原 遺跡は晩期にまで及んでいる点が西新井遺跡との関連で注目される。

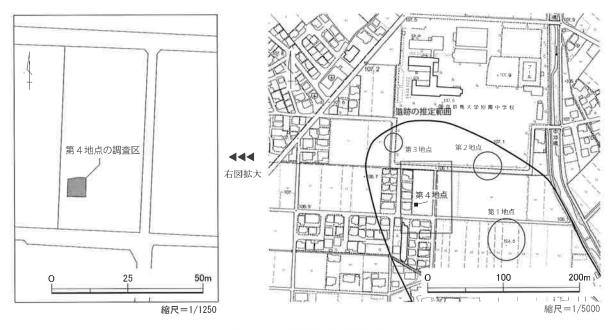
本遺跡は、北西一南東方向約550m、北東一南西方向約250mの範囲におよび、4つの遺物分布集中地点が確認されている。西から第3地点、第4地点、第2地点、第1地点である。このうち第1・2地点から多量に縄文後・晩期の遺物が採集され、第3地点の発掘調査では堀之内式~加曽利B式の粗製土器が数十点出土している。

第1・2地点の遺物は、縄文後期前半〜晩期終末の称名寺 Π 式〜千網式に及ぶ。これらの遺物は昭和30年代前半に行われた耕地整理に伴って地表に露出したものであり、第4地点の地層のように地表下1 m以上のところから遺物が出土したことからすれば、耕地整理によってかなり削平されたと考えられる。大型の自然礫も耕作のたびに大量に巻き上げられて畔などに散乱していることからすれば、第4地点と同じく氾濫原に遺物が散布しているのであろう。(設楽)



no.	遺跡名	所在地		no.	遺跡名	所在地
1	西新井	上沖町	西新井	14	北原	鳥取町北原
2	薬師	上細井町	丁薬師	15	東原	// 東原
3	天王	//	天王	16	天神	五代町天神
4	荒屋敷	//	荒屋敷	17	八幡前・藤木暮	嶺町八幡前・藤小暮
5	新田上	//	新田上	18	下大平	小坂子町下大平
6	南田之口	//	南田之口	19	大林下	嶺町大林下
7	南灰俵	//	南灰俵	20	入替戸・十二原	〃 入替戸・十二原
8	後原	端気町御		21	白鳥	小坂子町白鳥
9	大日	五代町フ	1日	22	端気丨	端気町塚越・着帳
10	端気前	端気町如	湍気前	23	芳賀北部団地	勝沢町高花台
11	太郎三前	上泉町	太郎三前	24	芳賀東部工業団地	鳥取町·小坂子町·五代町
12	市之進	嶺町市	と進	25	小神明	小神明町富士塚下
13	東曲輪	勝沢町頭	東曲輪		(設楽	(博己 2012 をもとに作成)

第1図 西新井遺跡の位置



第2図 西新井遺跡の推定範囲

4 十層堆積狀態

本遺跡の土層堆積状態は第4図・図版2のとおりである。基盤の砂礫層(W層)は古利根川の 河床礫層と推定され、インブリケーション(覆瓦構造)が観察され、北西から南東方向へ流れる 水流の影響を受けていることが確認される(中島啓治氏の教示)。

晩期の遺物を包含するのは、この砂礫層の直上の黒褐色土層(WI層)が中心であり、遺跡が利用されていたのは、離水後の氾濫原の環境下であったと推定される。

遺物包含層は、浅間 C 軽石(As-C:3 世紀末)を含む VI 層まで及んでいるが、その多くは VI 層中からの出土であり VI 層からの出土量は相対的に少ない。しかし、浅間 B 軽石(As-B:108 年降下)の純層である VI 層以上の土層からはほとんど出土していない。したがって、この遺物包含層は中世以降の二次的な撹乱はほとんどなかったと判断される。

ただし、調査区の西側部分はⅢ層が欠落しており、中世以降に南北方向に浅い溝が造られていたことが土層観察の結果から判明した。しかし、溝はⅥ層以下には到達しておらず、この二次的な撹乱は及んでいない。さらに、この溝部分に沿って土管を埋設した現代の暗渠が存在していることが確認された。公図上もこの溝部分で区分されており、長期間水路として利用されていたものと推定される。

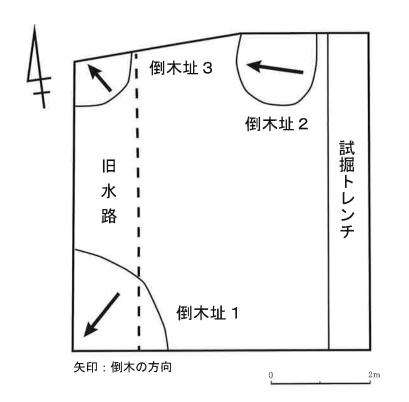
なお、本遺跡では6世紀の榛名山二ッ岳起源の2回の降下テフラ(Hr - FA、Hr - FP)の堆積は確認できない。おそらく、古代に河川の氾濫等により、これらの降下テフラが流失してしまった可能性がある。

大きな撹乱は倒木によるものである。調査区内には時期の異なる倒木址が3カ所確認されている(第3図・第4図・図版1・2)。以下、倒木址の特徴について述べる。

倒木址1 25・26・31・32区に存在していた。南西方向に倒れていたことが判明した。この部分には浅間 C 軽石 (VI c 層)の純層が比較的厚く残存しており、また中世以降の溝はこの倒木址を切って造られている。また前述の二ッ岳起源のテフラも確認されないことから、それ以前に倒れたものと推定される。

倒木址2 4・5・10・11区に存在していた。 WI層が大きく落ち込んでおり、東側はWI層が盛り 上がっていたので、西へ倒れたものであることが判明した。浅間 C 軽石層以上のテフラ層はよっ たく巻き込まれていないことから、それ以前に倒れたものと推定される。

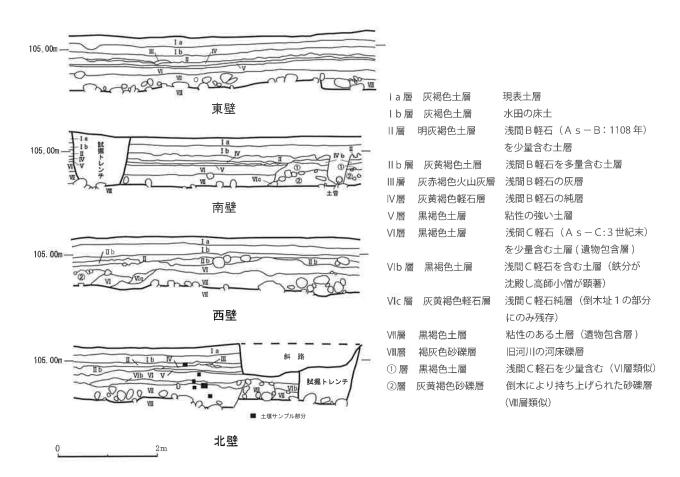
倒木址3 $1 \cdot 2 \cdot 7 \cdot 8$ 区に存在していた。1 区では \mathbb{Z} 層が落ち込んでおり、 $2 \cdot 7$ 区では \mathbb{Z} が盛り上がっていたことから、北西方向へ倒れたものであることが判明した。比較的小規模な倒木址であることと、倒木の中心は調査区外にあるので、どの時期に倒れたものであるか不明である。(大工原)



グリッド設定図

1	2	3	4	5	6
				11	
13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30
31	32	33	34	35	36

第3図 調査区平面図



第4図 調査区土層断面図

5 縄文土器と土偶

縄文土器は、大部分がⅧ層から出土した。

縄文土器の総破片数は1478片であり、内訳は有文口縁部が41片(約2.8%)、無文口縁部が94片(約6.4%)、有文胴部が184片(約12.4%)、無文胴部破片が1127片(約76.3%)、底部が32片(約2.2%)である。底部を除いた有文と無文の割合は、225:1221で有文の比率はおよそ18.4%、無文の比率は約81.6%である。

1は外面の下方に段を、内面に凹線をもつ口縁が内湾した加曾利B2式の鉢形土器。2は大波 状口縁の深鉢の波頂部破片と思われる。波頂部は2条の凹線をもつぐい飲み状をなす。高井東式 であろう。割れ口は研がれたように丸くなっている。縄文後期の有文土器は、この2片に限られ、 残るは晩期である。

晩期の有文土器は、在地系の土器と東北地方の大洞系の土器からなる。在地系の土器には、安 行系波状口縁の帯縄文土器とそれ以外の磨消縄文土器がある。

3~7は波状口縁の帯縄文土器。いずれも帯縄文は隆起しておらず、後期の土器のように口縁の内面が肥厚したものはまったく認められない。5は最上段が無文帯で縄文帯の位置が2段目となり、晩期前半でも新しい傾向とされる。7は安行3c式と同様に縄文を欠いている。

 $9 \sim 32 \cdot 35 \cdot 36$ は磨消縄文をもつ土器。 $9 \cdot 10 \cdot 13 \cdot 14 \cdot 22 \sim 28$ は頸部が屈曲する深鉢で、12はくびれのない砲弾形の深鉢と思われる。 9には独立した三叉文がつけられた安行3a式である。 $13 \cdot 22 \sim 24$ は入組み縄文であり、 $22 \sim 24$ などは入り組み文と合体した三叉文をもつか三叉文を欠いた安行3b式と思われる。16はB突起をもつその段階の鉢。 $25 \cdot 26$ は胴部の磨消縄文がレンズ状をなし、25はその会合部に特有の突起をもつ。29は安行3b式の台付土器台部。縄文帯を挟んで上下に透かしがある。 $30 \cdot 31$ は在地色の強い土器。30は丸い底部が段をなして突出する鉢形土器。縄文帯の上に三角状の磨消縄文を加える。31は口縁部の縄文帯の下に沈線帯を入れるが、その中に米粒状の列点文を加えており、安行3c式に併行すると考えられる。

33・34は細線文土器。33はB突起のある鉢形土器。細線は南関東地方のように整っておらず粗い。安行3c式に併行するのであろうか。34は瘤付土器の系統の可能性もある。

38・39は円形で中央が指で押しくぼめられた、群馬県地域の半精製土器に特有の突起である。

 $40\sim65$ は大洞系あるいはその地方類型。40は玉抱き三叉文の仲間であり、大洞 B_1 式土器。 $44\cdot46$ は羊歯状文とその系統の文様がある大洞BC式土器。 $47\cdot48$ は浮き彫り風の磨消縄文をもつ大洞BC式と大洞 C_1 式土器。 $52\sim55$ は大洞 C_2 式土器である。54は鉢形土器で搬入品かもしれない。 $52\cdot53\cdot55$ は福島県域などに顕著に認められる壺形土器の頸部である。

56~60は縄文をもつ土器。56や57には結節縄文が認められ、57は新潟県域から搬入されたものかもしれない。58~60のような縄文だけの破片も多く認められ、晩期に東北地方の影響によって出現したものと思われる。

63は良く磨かれた無文精製の鉢形土器。64は壺形土器。65は鉢形土器などの底部で大洞系土器特有の円形のくほみがある。

66~68は半精製土器。口縁がやや内湾した砲弾形の深鉢である。66は口縁部で、口縁部は段をなして肥厚し、その上に三角形の列点文を加えている。67・68はその胴部に相当する破片であり、67と68は別の個体と思われる。二条の沈線の間におなじように三角形の列点を加える。地文は粗い条線文を斜めにつけている。これらは安行3a式の半精製土器、いわゆる紐線文土器であり、

そのなかでも紐線文Aとされる類型である。

それ以外の $69\sim96$ は、口縁部の装飾を除けばまったくの無文粗製土器である。 $69\sim80$ は単純な口縁部であり、 $81\sim92$ は段をもつ口縁部の破片である。無段が27片に対して有段が67片と圧倒する。

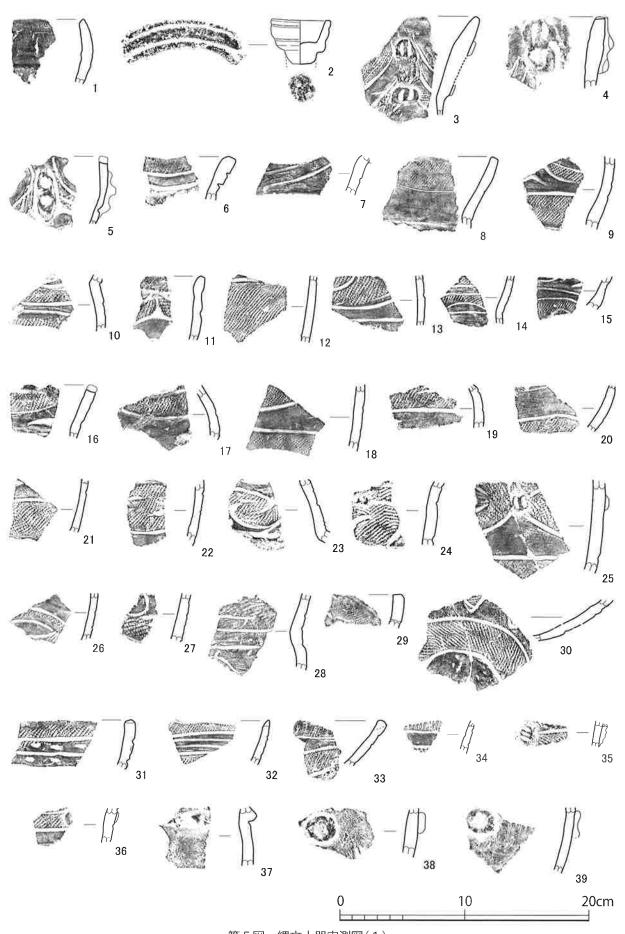
無段の76~78は口縁端部に刻み目をもつ。79・80は口縁端部に突起をもつが、通常のB突起ではなく、両端が直立して二つの頂部の間が弧状をなす。これらは、西日本の縄文晩期前半の黒色磨研土器に特有の鞍状突起、あるいはリボン状突起と呼ばれる突起と類似する。

有段では1段から3段以上まで認められ、複段もかなり多い。1段には81~83のように三角形の貼り付け状の肥厚をなすものと85~88のように折り返し状をなすものとがある。複段は89のように前者の特徴をもつ破片もあるが後者が多く、それらは概して薄手で口縁が内湾し口縁端部の尖るものが多い。1段の前者は厚ぼったいつくりであり、66の安行3a式土器の特徴を模倣した地方類型であるとすれば、1段の厚手から複段の薄手への変化が推測できる。

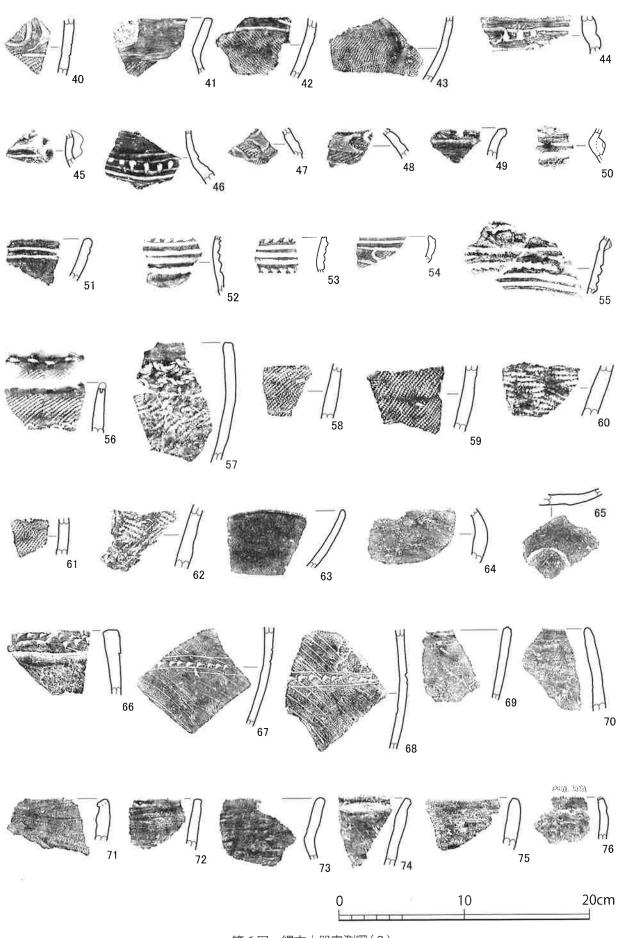
無文粗製土器は、93・94のように削り痕が顕著なものが多く、まれに95にみられる粘土紐の積み上げ痕を残すもの、96のように削り痕の上から条痕を施すものもある。96の条痕は貝殻条痕に似ているが、木口による条痕としておきたい。

底部の底面は無文が多く、網代が2個体、木葉文が4個体といずれも少ない。100のような上 げ底も認められた。

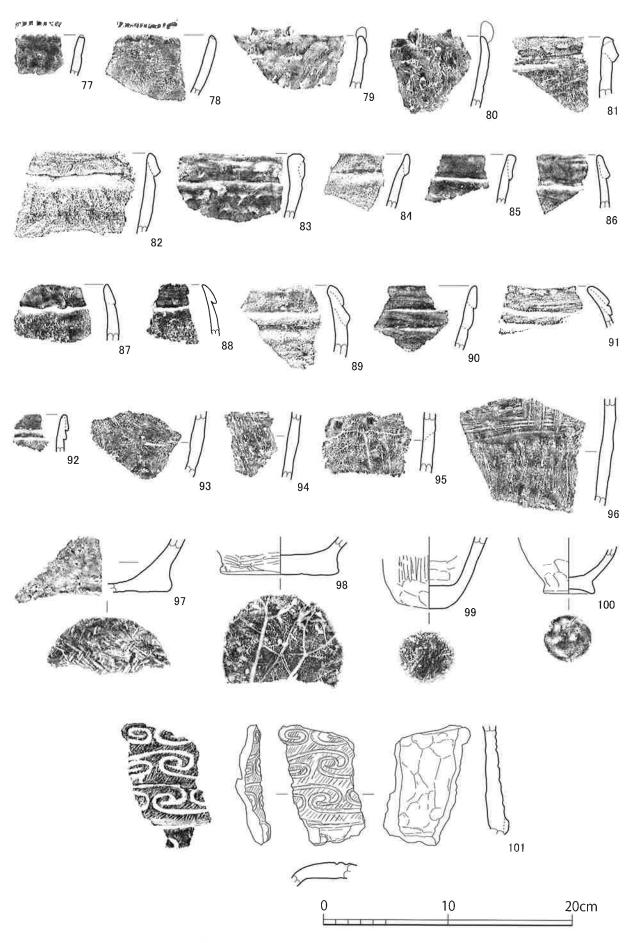
101は土偶である。中空で、大洞系の遮光器土偶を模倣した土偶と思われる。断面を見ると直角に近く折れ曲がっていて、内面の調整は粗いことが中空土偶であることを示している。残っている面はおそらく背面と思われ、入り組みの磨消縄文が配される。下部には装飾がついた隆帯がめぐっており、それも遮光器土偶の特徴の一つに数えることができる。文様からすると、大洞BC式に併行するであろう。(設楽)



第5図 縄文土器実測図(1)



第6図 縄文土器実測図(2)



第7図 縄文土器実測図(3)・土偶実測図

6 縄文石器

出土状態 石器類の分布をみると調査区の北半部が多く、南へ行くほど少ない傾向が認められる。これは調査時の包含層までの掘削深度の違いによるものと判断され、VI層出土遺物は南半部では非常に少ない。また、倒木址1部分は土層が大きく乱れていたので石器は少ない。調査範囲も狭いので、分布傾向から特筆することはない。

石器組成 今回の調査では、403点の石器が検出された。器種別・石材別内訳は第1表のとおりである。狭義の石器は25点(6.2%)に過ぎない。なお、黒色頁岩の剥片は、石鏃と打製石斧の両方の素材となっているため、石鏃の素材剥片となり得る13gを境にそれ以下をA類、それ以上をB類として分類した。剥片A類は232点(57.6%)と最も多く、次いで剥片B類が141点(35.0%)である。両者を合わせると92.6%であり、非常に活発に石器製作が行われていたことが分かる。石器器種組成の特徴は、石鏃・打製石斧・スクレイパー類などの打製系列の器種が大部分を占めており、磨石・凹石・石皿等調理に関連する器種や、石棒・石剣等の儀礼・祭祀用の器種が全く出土していないことである。これをみると、石器製作を中心とした作業と、石錐・スクレイパー類などを用いた作業が行われていたことを示している。

また、石材個数組成をみると、黒色頁岩が190点(47.1%)と最も多く、黒色安山岩113点(28.0%)

と利根川で入手可能な石材が75.2%を占めている。また、遠隔地からの搬入石材であるチャートが74点(18.4%)と比較的多い点は注目されよう。さらに石材重量組成でみると黒色頁岩が3049.7g(68.1%)、黒色安山岩が1086.7g(24.3%)となり、92.4%が両者によって占められている。足下で手軽に入手できる石材が多用されていることが分かる。

	Ob	Ch	HSh	珪Sh	メノウ	BAn	BSh	An	Sa	片岩	計
石鏃		1	1			1	3				6
石錐							1				1
ScA		1		1							2
RFA		1					1				2
石核A		2					1				3
FlA	10	69	6	1	1		145				232
打斧							4				4
ScB						2	6				8
石核B						1	1				2
FlB				_		109	28	4			141
敲石									1		1
砥石?										1	1
計	10	74	7	2	1	113	190	4	1	1	403
重量 (g)	8.3	274.2	7.8	3.5	0.3	1086.7	3049.7	13.8	28	4.7	4477

第1表 西新井遺跡の石器・石材組成

石鏃(1~6) 6点出土している。1は硬質頁岩製の細身の凸基有茎鏃で、先端部が摩耗しており、石錐に転用されている。2はチャート製の凸基有形鏃、3・4は黒色頁岩製の平基有茎鏃である。5は黒色頁岩製の有茎鏃の欠損品であり、表裏面に被熱による剥落が認められる。6は黒色安山岩製の凸基有茎鏃の未成品で、表面の風化が著しい。古い時期の混在の可能性がある。

石錐(7) 1点のみである。黒色頁岩製で、使用による摩耗痕は認められない。

石核A類(8~10) 3点出土している。8は良質のチャート製の小さな残核であり、剥離の限界まで剥離されている。これに対し、9はやや質の悪いチャート製で、まだ剥離できる大きさであるにも関わらず放棄されている。10は良質の黒色頁岩製の石核で、大きさ的にはまだ剥片を作出することは可能であるが、作業面は剥離の限界に達してしまい放棄されている。いずれの石核も原礫を割って打面を設け、そこから連続的に小形の幅広不定形剥片を剥離している。ここから作出される剥片はちょうど石鏃素材剥片のサイズであり、これらを剥離するための石核であったと判断される。

打製石斧(12~15) 4点出土している。黒色頁岩製の打製石斧基部の残存品であり、調整加工が不十分であることと、摩耗痕が観察されないことから、いずれも未成品と判断される。12~14 は洋梨形か短冊形か判断できない。15は谷地遺跡に存在する特徴的な凸字形態の基部破片と推定される。

スクレイパーB類($16\sim18$) 8点出土している。縁辺1/2以上に何らかの二次加工が施されているものをスクレイパーと定義している。すべて Π 形態(直接打撃により調整)である。やや定型化しているものを図示した。17は黒色頁岩製のもので、表面右側縁部に刃部が作出されており、左側縁部には刃潰し加工が施されており、弱い摩耗痕が認められるので、実際に使用したものと判断される。 $16\cdot18$ は黒色安山岩製のもので、後述する石核と対応するものである。他には鋸歯状のものが存在する(図版 $6-19\cdot24\cdot25$)

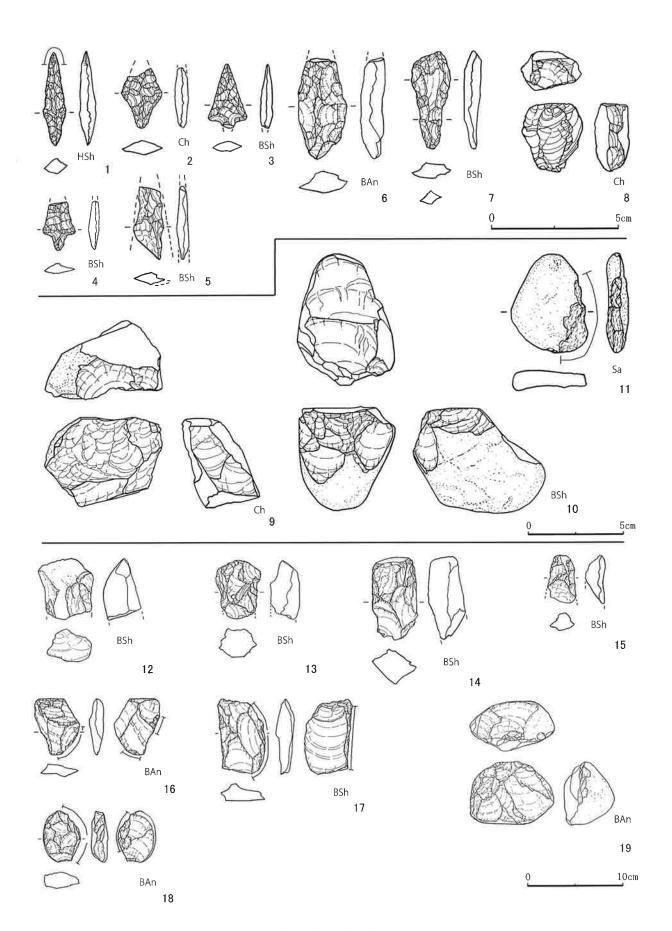
石核B類(19) 2点出土している。19は黒色安山岩製の石核で、原礫の大きさからみて打製石 斧用ではなく、スクレイパーB類の素材剥片の作出を目的としたものと判断される。16・18のようなスクレイパーがこれに対応しよう。また、もう1つ(図版 6-29)は、大形剥片を素材とした黒色頁岩製の石核であり、連続的に幅広不定形剥片を剥離している。同じくスクレイパーB類の素材剥片を作出するための石核と推定されるが、打製石斧未成品の可能性もある。

敲石(11) 砂岩製の小形敲石で、側縁部に敲打痕が認められる。石核A類から剥片剥離するためのものか、スクレイパーB類の二次調整用のものと考えられる。

砥石?(図版6-28) 片岩製の小破片で、表面が著しく摩耗している。仕上砥と推定されるが、 石皿の断片の可能性もある。(大工原)

刘版№.	図No.	資料No.	出土位置	層	器 種	形態	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	欠 損	備考
1	1	1	試掘		石鏃	凸・有	HSh	37	9	6,4	1.6		先端部磨耗
2	2	9	18区	VII	石鏃	凸・有	Ch	23	16	5,4	1.5	先端欠損	
3	3	10	28区	VII	石鏃	平・有	BSh	25	15	4.7	1.3	茎部欠損	
4	4	8	08区	VII	石鏃	平・有	BSh	19	13	4,3	0.7	先端欠損	
5	5	11	28区	VI	石鏃	有	BSh	28	13	4.5	1.4	先端・基部欠損	被熱による剥落
6	6	7	07区	VI	石鏃未成品	凸·有	BAn	40	19	9,1	7.7	先端欠損	
7	7	6	02区	VI	石錐		BSh	38	15	6.6	3.9		表面風化
8		23	04区	VII	スクレイパーA	Ia形態	珪Sh	22	20	7.7	2.9		
9		25	06区	VII	スクレイパーA	Ⅲ形態	Ch	43	20	15.8	9.4		
10		22	02区	VII	RFA		Ch	32	11	6.7	_ 2		
11		28	09区	VII	RFA		BSh	17	13	4.2	0.8		
12	8	15	23区	VII	石核 A		Ch	27	24	15	10.7		
13	9	27	09区	VII	石核 A		Ch	49	63	42	100		
14	10	18	04区	VI	石核 A		BSh	55	51	70	219		
15	12	2	試掘		打製石斧	不明	BSh	61	58	34	140.5	基部残存	
16	13	17	02区	VII	打製石斧	未成品	BSh	62	49	30	95.2	基部残存	
17	14	4	試掘		打製石斧	未成品	BSh	89	48	35	168		
18	15	3	試掘		打製石斧	凸形	BSh	52	30	21	25.5	基部残存	
19		12	04区	VII	スクレイパーB	Ⅱ形態	BSh	64	37	22	47.2	先端部欠損	鋸歯状
20	16	13	19区	VII	スクレイパーB	Ⅱ形態	BAn	60	49	14	34.9		
21	17	14	21区	VII	スクレイパーB	Ⅱ形態	BSh	77	55	18	72.6		磨耗痕あり
22	18	16	28区	VII	スクレイパーB	Ⅱ形態	BAn	55	40	17	48.6		
23		20	不明	VI	スクレイパーB	Ⅱ形態	BSh	54	56	14	36.5		
24		29	14区	VII	スクレイパーB	Ⅱ形態	BSh	54	58	23	68.1		
25		24	05区	VII	スクレイパーB	Ⅱ形態	BSh	35	27	9	8.9	先端部残存	鋸歯状
26		30	23区	VII	スクレイパーB	Ⅱ形態	BSh	32	20	9		先端部残存	
27	11	21	17⊠	VI	敲石		砂岩	53	39	10	28		
28		26	08区	VI	砥石?	仕上砥	片岩	32	22	5	4.7		
29		5	試掘		石核 B		BSh	80	147	45	457		
30	19	19	北半部	VII	石核B		BAn	66	89	55	349		

第2表 西新井遺跡石器一覧表



第8図 石器実測図

7 成果と問題点

(1) 西新井遺跡第4地点の縄文土器と土偶について

第1・2地点から多く採集された後期の土器は、第4地点ではわずか2点出土しただけであった。そのうちの高井東式土器の波状口縁端部の破片は、特殊な扱いをされているようである。埼玉県赤城遺跡では、古い縄文土器の把手などを集めて儀礼をおこなったような場が検出されており、第1・2地点から晩期に持って来たものかもしれない。

第4地点から出土した土器は、ほとんどすべて縄文晩期であった。およそ8割以上が無文の破片と比率が高い。無文土器のほとんどが粗製土器であるから、精製・半精製土器と粗製土器の比率は1:4である。

晩期の精製土器は、在地の系統のものとしては安行3a式土器から安行3c式土器におよぶ。それらは帯縄文土器と大洞系B式土器の影響を受けた安行系の土器からなっている。磨消縄文をもつものには在地色の豊かなものもあるが、かつて第1・2地点で採集された土器に認められた、安行3b式に特有の細かい列点をもちながらも在地化した土器は認められず、地点によって土器の様相に違いがある。

外来系の土器には大洞系土器のほかに新潟県域方面と思われる粗製土器が認められた。大洞系土器には大洞 C₂式土器も存在しているので、在地の土器に安行3d 式土器に併行するものも含まれている可能性があるが、抽出できなかった。信濃地方の佐野式に特有な太い沈線による磨消縄文の土器や鍵手文、あるいは粗大な工字文はまったく認められない。第1・2地点で多量に採集された土製耳飾りに信濃地方とのつながりが強く認められることからすれば、土器と土製品の地方間の影響関係に差があると考えざるを得ない。

安行3a式の紐線文土器は、第1・2地点では全く認められず、群馬県域では板倉沼など埼玉県域に接した地域を除けばほとんど流入していない。この土器もおそらく埼玉県域北部やそれに接した群馬県域からもたらされたものであろう。

粗製土器は縄文を装飾したわずかな破片以外、ほとんどすべてが無文土器で構成されている。そのなかでも群馬県域の晩期土器型式として設定された天神原式に特有の有段口縁粗製土器型式がおよそ7割を占めているが、厚手で1段が安行3a式の紐線文A類の影響で出現し、薄手で複段へ変化したという型式学的な変遷を推測した。単純口縁のなかに西日本の鞍状突起の影響が指摘できたことも今回の大きな成果であった。安行3c式に位置づけられ、近畿地方の篠原式、九州地方の黒川式に併行するであろう。

土偶は大洞BC式に併行する時期の遮光器土偶が出土した。第1・2地点では安行系のミミズク土偶の系統のものと大洞系の地方類型の忠実土偶が採集されていたが、遮光器土偶はこの遺跡では初めて出土した。地方化が著しく進んでいることは群馬県域の大洞系の土偶に通有の特徴といえる。

出土した土製品はこれだけであり、第1・2地点で100点ほど採集された土製耳飾りはまったく出土しなかった。調査面積が狭かったためかもしれないが、かなりの量の晩期前半の土器が出土したにもかかわらず、まったく出土しないかわりに遮光器土偶が出土したことなどからすれば、遺跡でも地点によって儀礼の道具の傾向に差のあることが推測できる。(設楽)

(2) 西新井遺跡第4地点の縄文石器について

この遺跡の立地環境が、旧利根川の氾濫原ということで、圧倒的多数を占めるのは、河川礫として存在する黒色頁岩の剥片類である。この石材に石核A類(10)では小形原石から直接小形剥片を剥離しており(一次剥離工程)、石鏃素材剥片が作出されていたことは間違いない。しかし、ここから押圧剥離により石鏃を製作する二次剥離工程を示す未成品や調整剥片は全く確認できない。したがって、出土した石鏃3点(3~5)、石錐1点(7)については、すべて別の場所からこの場所へ持ち込まれたものである可能性が高い。したがって、ここでは石鏃の素材剥片を得ることを目的とした剥片剥離作業が行われていたとものと判断される。

次に、利根川では入手できないチャートについて検討してみたい。原石を素材とした石核A類2点(8・9)が存在しているので、遠隔地(渡良瀬川流域・神流川流域)から原石を搬入し、直接小形剥片を剥離(一次剥離工程)していることが分かる。チャートの剥片でも二次剥離工程を示すものが確認できないので、やはり、黒色頁岩同様、この場所で石鏃の素材剥片を作出する作業のみが行われていたようである。

しかし、黒曜石の剥片 A 類は、小剥片が10点存在する。これらは一次剥離工程と二次剥離工程の剥片が含まれていると判断され、しかも石材の特徴から複数の母岩から剥離されたものである。よって、ここから少し離れた場所での石鏃製作が暗示される。

また、これ以外に黒色頁岩では打製石斧が4点($12\sim15$)出土しているが、いずれも未成品であった可能性が高い。剥片B類の中には打製石斧の調整剥片が存在しており、ここで打製石斧が製作されていたことは、ほぼ間違いない。しかし、ここでは原石から大形剥片を作出する最初の製作工程(一次剥離工程)の剥片は見当たらないので、大形剥片を持ち込んで、打製石斧を仕上げる工程(二次剥離工程)の資料のみが存在している。石核B類(図版4-29)も原石から剥離されたものではなく、打製石斧の素材となるような大形剥片が素材なので、基本的には打製石斧と同じ工程(二次剥離工程)のものである。この工程で作出された中形剥片に調整加工(三次剥離工程)を施し、スクレイパーB類(図版4 $-23\cdot24$ のようなもの)を製作していたと推定される。

一方、旧利根川の転石として存在する黒色安山岩の石核B類(19)は、中形原石から直接剥離しており(一次剥離工程)、この工程で剥離された中形剥片を素材としてスクレイパーB類(16・18)が製作されている(二次剥離工程)。このように、黒色安山岩では原石からスクレイパーB類を完成させるまでの一連の製作工程が確認できる。

このように、この場所は石鏃の素材剥片作出と打製石斧・スクレイパーB類の製作を中心とした石器製作作業が行われていたと推定される。また、これとは別に石鏃やスクレイパー類と石錐が持ち込まれおり、それぞれに使用痕が認められることから、こうした道具を用いた何らかの作業が行われていた可能性が高い。

しかし、調理や儀礼・祭祀に関わるような石器は全く出土していないので、通常の居住空間と は異なった場所である。おそらく、集落内においても特定の作業行う作業空間であったと推測さ れる。

この石器群は、ほぼ時期が限定されており、縄文時代晩期前葉における石器製作の在り方を理解する上で、重要な資料であると言えよう。(大工原)

参考文献

- 小島純一 1981 『稲荷山K1・安通、洞A3-昭和54年度県営圃場整備事業に伴う発掘調査概報-』 勢多郡粕川村教育委員会
- 設楽博己 1984 「前橋市上沖町西新井遺跡の表面採集資料(上)」『群馬考古通信』 9 群馬県 考古学談話会
- 設楽博己 2012 『前橋の後・晩期の遺跡から-設楽コレクション-』 設楽コレクション図録製作委員会
- 設楽博己 2013 「群馬県前橋市上沖町西新井遺跡の土製耳飾り」『日本先史学考古学論集 市原 壽文先生傘壽記念 - 』 市原壽文先生傘壽記念論文集刊行会
- 大工原 豊·林 克彦他 1994年『中野谷地区遺跡群』 安中市教育委員会
- 大工原 豊 2003 「後・晩期の石鏃について」『第11回岩宿フォーラム/シンポジウム刺突具の 系譜予稿集』 笠懸野岩宿文化資料館
- 大工原 豊 2008 『縄文石器研究序論』 六一書房
- 並木勝洋·阿久澤智和 2013『安通·洞No.2遺跡』 前橋市教育委員会

図版 1



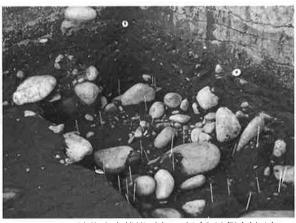
調査前の状態(南西方向から)



調査前の状態(北東方向から)



V層まで除去した状態(北から)



1区・2区遺物出土状態(奥のくぼみは倒木址3)



調査終了状態 (別層上面 南から)



調査終了状態 (VIII層上面 北から)

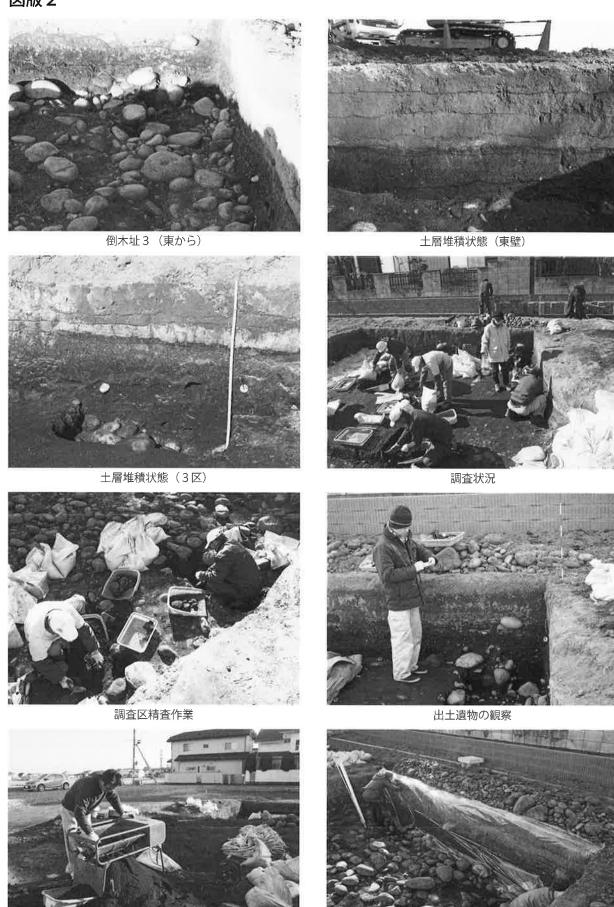


倒木址1 (北東から)



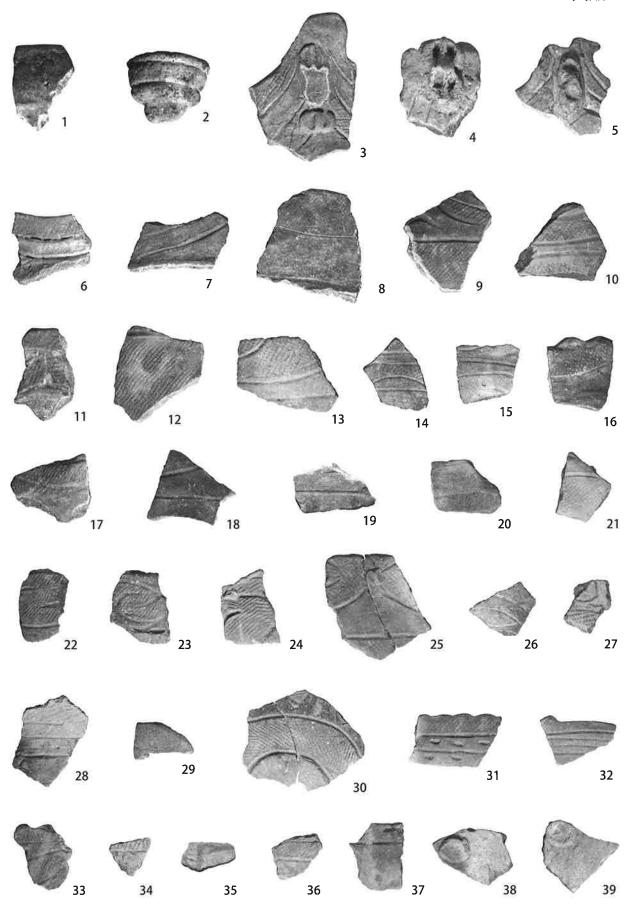
倒木址2 (南から)

図版2

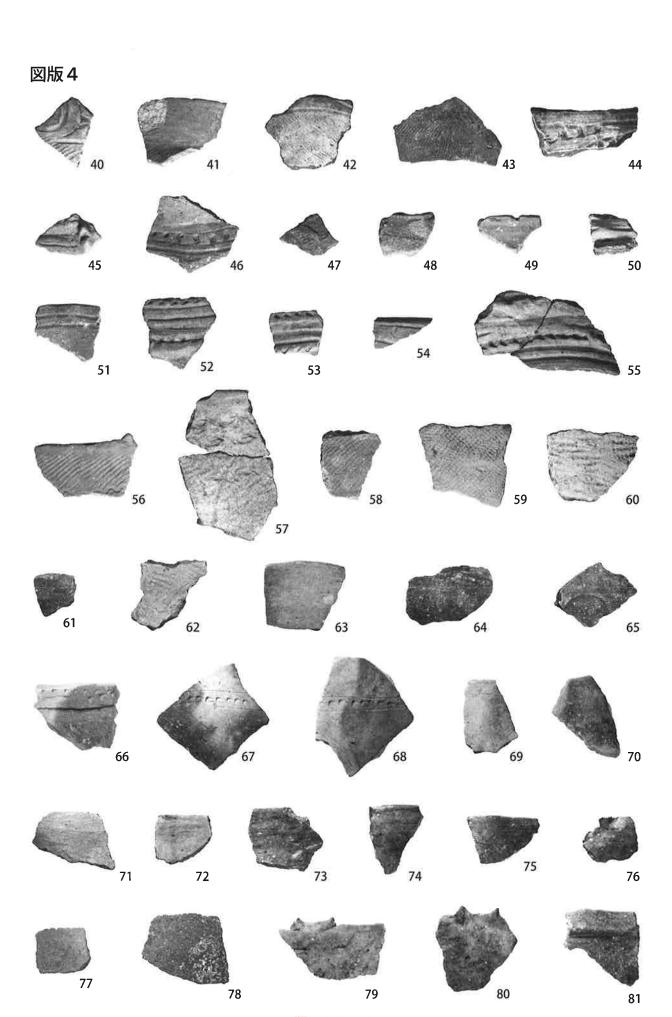


電動フルイを用いた遺物選別作業

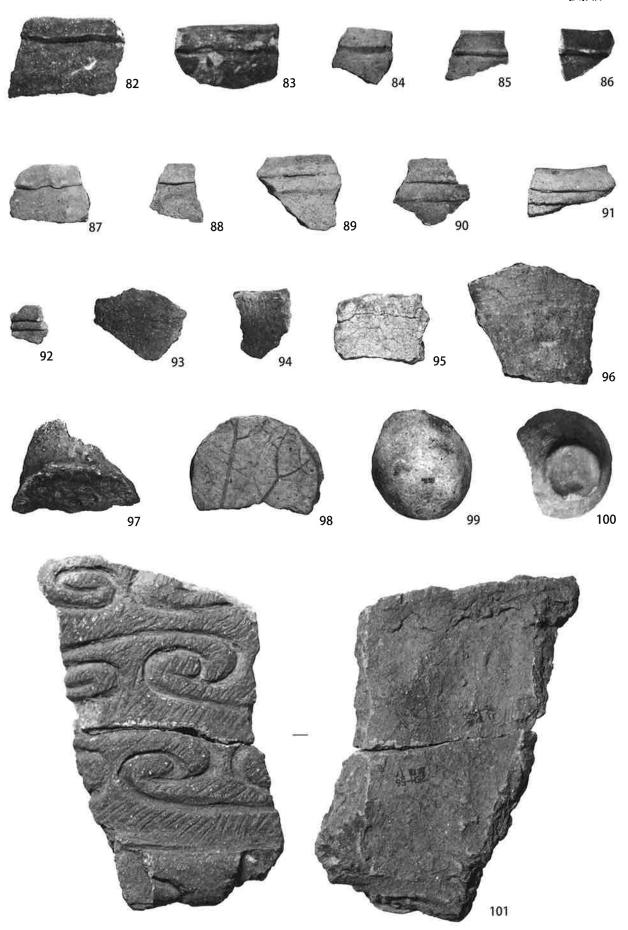
ポリフィルムを用いた土層断面図作成



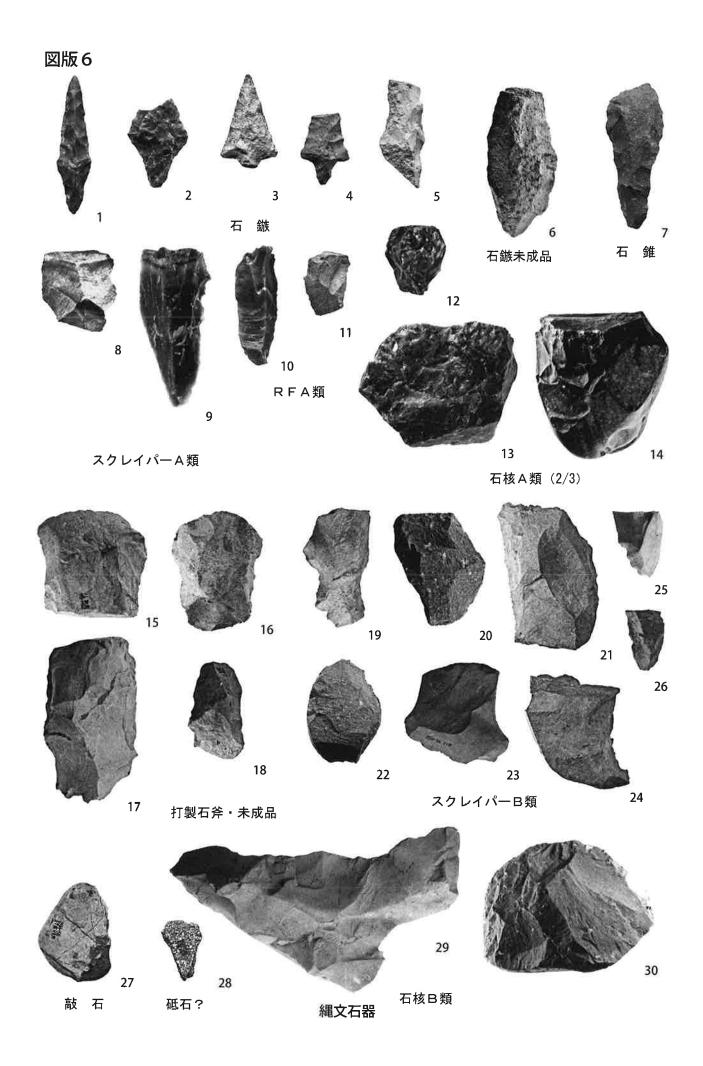
縄文土器(1)



縄文土器(2)



縄文土器(3)・土偶



抄 録

フ	IJ	ガ	ナ	ニシアライイセキダイ 4 チテン			
書	西新井遺跡第4地点 西新井遺跡第4地点						
副	副 書 名 老人ホーム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻			次				
シ	リ -	- ズ	名				
編	著	者	名	大工原豊・設楽博己・長井正欣・浅間陽・福田貫之			
編	集	機	関	有限会社毛野考古学研究所			
発	行	機	関	前橋市教育委員会			
発行	発行機関所在地 〒 371-0853 群馬県前橋市総社町 3-11-4 Tel 027-280-6511						
発	行生	F 月	日	西暦 2014 年 7 月 31 日			

ふりがな	ふりがな		コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調本店国
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	(世界測地系)		- 神色州川	m²	調査原因
西新井遺跡第4	ぐんまけんまえばししこうづか 群馬県前橋市幸塚	10201	25H56	36°	139°	20140115	36	老人ホーム建設
ちてん	^{まち} ばんち 町 75 番地			24'	5′	~		
SEAW.	1,10 円 2			26"	15"	20140123		

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
西新井遺跡第4	集落	縄文時代	倒木址	3箇所	縄文土器	縄文時代後晚
地点			遺物包含層	1面	土偶	期の遺物包含
					石器	層を確認。

西新井遺跡第4地点 老人ホーム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成 26 年 7 月 24 目印刷 平成 26 年 7 月 31 日発行

編 集/有限会社毛野考古学研究所

発 行/前橋市教育委員会 前橋市総社町 3-11-4

Tel 027-280-6511

印 刷/朝日印刷工業株式会社

